残り少なに打ちなされ、軍半ばの事なるに城の中より六尺余りの大男、髭逆さまに生え顔に憎ぞう表わし、眼の上大なるこぶ出、大童になって鉄の棒を打ち振り、群ごうたる大勢に割って入り、力に任せ打って廻る、真こう小額、左右の小手、甲のてっぺん、胴中、もろ臑、あたる所を幸いに、はらりはらりとなぎ伏する。近づく者を十四、五人打ち倒し、大勢を四方へぱっと追い散らし小高き所に走り上がり、暫く息をつき、我相模守殿より深き御恩得たる百姓なり、髭の恐ろしくあるゆえ字名を黒熊とぞ申すなり、この度の御大事に命を君に奉る、我と思わん人あらば出て手並を見給え、と高らかに呼ばわりける。

寄手の人々これを聞き入れず、土民の軍好みしより、田畑耕すべし、首を切られて其の後は妻子に物思いさせんより引きしざれと笑いける。されどもこの男に出合う者はなかりける。

ここに寄手の方より小松作太郎と名乗りて真黒に出で立ち、黒熊なればとて何程の事かあるべきと、二尺八寸太刀打ち振り切って掛かる。黒熊これを見て天晴若者かな、と棒振り上げて打ち掛かる。作太郎も右へ廻り左へ廻り一時ばかり戦いしが、何とかしたりけん、黒熊が棒請けはずし眉間に打ち込まれ、朝の露と消えにけり。

次に隼人が嫡子隼人之助、太刀抜きかざし打ってかかる。黒熊心得たりと件の棒を、おっとり廻し渡り合う、ここをせんどと火花を散らして戦いける。隼人之助が太刀打ちの名人にして請け、ぱっ

ぱっ棒の上を蝶・蜻蛉の如くなり、黒熊元より棒は上手の事なれば物の数とも思わぬ、既に隼人之助危く見えし所に舎弟、隼友これを見て太刀抜きかざし走り寄り、兄弟二人一緒になりまくり立てぞ責めたりける。何れも太刀は上手なり。さしもに猛き黒熊も下手になって見えにける。隼人之助つっと入り、たたみかけて打つ程に弓手の腕を打ち落とす、ひるむ所を隼友すかさず首打ち落とし寄手の陣へ入りにける。彼黒熊が最後の程、敵も味方も押し並べて惜しまぬ者こそなかりけり。

さて、黒熊と申すは卑しき土民の子なれども人相常に替わり、背高く色黒く虎髭逆しまに生え誠に希代の荒者なり。相模守も、いかさま希代の生れつき、自然の用にも立つべきかと常々御言葉をかけ給いけり。その恩を忘れずしてこの度の打ち死の心ざし、やさしかりける次第なり。

一日一夜の合戦に兵庫守が勢を始め五十目・馬場目の勢、共にことごとく討たれける。城の内にても残り少なに打ちなされ、大高、今はこれまでなりと中門につっと入り、肌には紅村口の小袖、くさり帷子着こみにて、緋縅の腹巻取ってさっと着、踊り上がり高紐にかけゆって内帯しめ、霞にかきんの頬当し、村千鳥の左右の小手、獅子に牡丹のはいたてし、ひょうひょうみがきの臑当に熊の皮の鞣足袋をあくちたがにすっこうて、同じ色の甲を着け、安部重代のいかもの作三尺八寸はくままに、馬に打ち乗り門外に掛け出、鎧ふんばり、つっ立ち上がり大音上げ、いかに寄手の者ども、康澄の最期の軍を見て末代の手本にせよ、と大太刀真向にかざし多勢の中へ割って入り、西から東